

ハイスクール17

夏木康志

目次

承前：黒帯を取得してからスーパータイガージムに通うまで	1
少年と呼ばれた日々	3
試合の DVD	5
ハイスクール 17	7
後日談	9
国際試合!	11
ロボット	13
柔術はじめました	15
カポエイラはじめました	17
カポエイラ緑帯取得しました	19
あとがき	21
奥付	
奥付	25

承前：黒帯を取得してからスーパータイガージムに通うまで

ハイスクール17というタイトルですが、主には高一時代の15から16の時の話です。15才で柔道初段を取得して、それからスーパータイガージムに半年くらい通った、その間の話をしたいと思います。

講道館で柔道初段を無事取得した俺は、川崎市の市営武道館に通っていた。柔道の夏期練習会や、空手や少林寺拳法の入門教室に通うためだ。週に一回のペースで三ヶ月、空手道教室や少林寺拳法教室が、一回武道館利用料のコストで習うことが当時は可能だった。3ヶ月お試しの入門武道教室に参加して、気に入った方は入門して月謝を払って、というシステムだと思う。ちなみに柔道は既に黒帯だったので、普段の稽古に武道館利用料の費用のみで参加できた。

空手道は松濤館流で、平安初段を覚えるまでが、入門教室の内容だ。どこか俺のセンスがなかったため、オレンジ帯（上手い人は三ヶ月で水色帯）しか取得できなかった。

少林寺拳法は柔法と剛法からなり、まずは友愛の精神に基づくことと、仏教（＝寺）の教えの一環としての教育という方針であった。当時少林寺拳法を習って思ったのは、柔道の教授法が合理性（技を分解して基礎から教える）を重視しているのに対して、少林寺拳法は痛い技を師範・先生が掛けて体で覚える方式だった。たしか流水蹴りとかを習った程度だ。

空手道の入門教室を習っていた際に、市営武道館で発見したのが、大道塾空手（＝当時はまだ空道ではなく空手だった）の一派の人たちが、松濤館空手の一段の脇で、練習していたことだ。彼らはスーパーセーフを持参して、実践的な近代のジャブ、ストレート、フック、アッパー、ボディといったパンチや、回し蹴りを練習していた。

初心者空手道は、松濤館流のため、腰に溜めるパンチと、前蹴りや横蹴りといった、回し蹴りではないキックを練習していた。

三ヶ月のお試し入門教室をコンプリートすると、月謝制の空手道と少林寺拳法の教室の勧誘を受けた。当時親に相談したところ、中堅の私立高校にわざわざ月謝と交通費を払って通わせているのに、それ以上のことを求められるのであれば、バイトをして通えと言われた。

せっかくバイトを週に一回日曜日に高校に黙って行うのであれば、一番習いたい総合格闘技を習いたいと思い、シューティングのジム、スーパータイガージムに半年通った。最初のバイトの2ヶ月は入門料と月謝を稼ぐために、バイトだけして、入門料と最初の月謝が貯まってから、ジムに通った。

一応中堅の進学校であったため、高一の後半くらいからバイトを始めてジムに通ったが、定期試験の成績が極端に下がってしまった。準備のいらない実力試験の成績は非常に良かったため安心していましたが、高2になって文系と理系に分かれた際に、下のクラスに配属されてしまい、一旦バイトとジムを辞めて受験勉強に専念することにした。その後、一年半の受験勉強で無事東京大学に現役合格した。

その話は、まだどこかで書こうかな。

少年と呼ばれた日々

高校時代の僕のあだ名は「少年」だった。ちなみに今は「さんま大臣」や「サバット氏」と呼ばれている。自分を今の年になっても僕と呼ぶ人間に、自分は少し抵抗がある。周囲で「僕」と自分を呼んでいる人間に心当たりがあるとすれば、大学のBOSSくらいのものだ。高校時代だったら、自分のことを僕と呼んでも、まだ許されるだろう。

高校生の時、「少年」と呼ばれた理由は一つだけだった。格闘技のジムに通っていて、指導者が付けた呼び名が「少年」だった。実際、自分は当時少年だったし、他の練習生はファミコンやチャージという呼び名で、プロ選手は直接名前にさん付けて呼ばれていた。一緒に練習したプロ選手はもう、チャンピオンになって、今は彼自身の名前のジムを持っている。年端もゆかない「少年」と一緒に練習してくれたのだから、当時は彼もプロに昇格したばかりだったのだろう。

自分が小学校に上がる前に、タイガーマスクという漫画が流行していた。でも、そのタイガーは真の格闘技を追求して、リングを離れて独自の総合格闘技を創始したのだった。中学の時、週刊プロレスの中表紙で、馬乗りになってパンチの仕方を解説しているタイガーの姿を見て、これが究極の格闘技なんだと思った。それで、いろいろあってスーパータイガージムに通わせてもらった。

柔道初段からタイガーの総合格闘技、それからサバットという打撃系格闘技を習って、今に至っている。本当は今でもタイガーの創始した総合格闘技が究極だと思っているけど、練習環境がいいのでサバットを続けている。もちろん、練習だけ、だけど。

試合は柔道とサバットしか出たことがない。柔道は高校一年の時、初段をとってやめて、タイガーの格闘技を習いに行った。大学を半ば卒業して、大学院に進むと、サバットのクラスが大学の体育館で習えることがわかった。ふと気付くと、7年くらいサバットを習っている。

実際、タイガーの格闘技を習ったのは半年くらいで、打撃の基本と、タックルの基本や、簡単なスパーリングをやっただけで、総合の試合に出たことはない。でも、タイガージムに通わせてもらったのは大きな財産になっている。もともと柔道から格闘技をはじめたので、打撃は苦手だ。タイガージムでもワンツーフックアッパーや、コークスクリューキックを習った程度だ。でも、そのおかげで、大学のサバットのクラスについていける。

タイガージムで、打撃の練習をする時は、特にスパーリングは怖かった。マウスピースなしで、大きめのグローブやヘッドギアを付けて殴り合う。殴り合いのケンカなど、いや、ケンカ自体したことがなかった。ただ、殴られるのは嫌이었다。相手のグローブを押さえれば、なぐられない。それだと消極的だから、ワンツーフックを出す。隙があったら、フック。相手がプロだったら、油断するとすぐアッパーを貰った。

逆に組み技のスパーの時は、柔道だったら一本の払腰が決まっても、逆にポジションを奪われたら、そこまでだった。マットは畳やコンクリよりは柔らかいし、寝技になってからマウントをとった方が、勝つ。

柔道部にいた頃は、裏投げを使うと嫌われたが、ジムではバック投げは、ポジションを上手くコントロールすれば、推奨されている技だ。

高校時代、17歳頃、自分は「少年」と呼ばれ、スーパータイガージムに通っていた。

試合の DVD

あの DVD は自分の中では家宝になっている。サバットの試合の DVD だ。初の学内試合のメインイベントで、ポイント制のライトコンタクトの競技（＝アソーと呼ばれている）を録画したものだ。

3 ラウンド勝負。相手はかなり強い。1 ラウンド目は、空中二段蹴りを出して見せ場を作ったが、あとのラウンドは取られて、判定負けだ。

当時のサバット仲間は、テコンドーや合気道、空手を習っていた。柔道初段の自分を含め、ほぼ何かの格闘技で黒帯の実力を保持しつつ、なぜかサバットを大学で習い、試合に出ていた。

サバットはシャッセという横蹴りを多用する靴を履いたフランス発祥の格闘技だ。

最初、ローリングソバットで、サバットは踵蹴りを意味するのかと思っていた。だが、後ろ回し蹴りもシャッセトゥルナンと呼んで、サバットとは呼ばない。フランス語の辞書を調べると、サバットは古い靴という意味があるらしい。靴を履いて、グローブをはめるフランス式キックボクシング、それがサバットだ。ちなみに回し蹴りはフェッテと呼ぶ。

もちろん、試合に出た仲間の中には、同門の人もいた。スーパータイガージム仕込みのコークスクリュウキックを使うファイターがいた。もちろん、自分は同じシューティングを習っていたことは、秘密にしておいた。

格闘技を修行する人の鉄則は、自分の流派は絶対に他人には教えないことだった。ましてや、同門の人に、同じ流派を習っているとは、話してはいけない。試合で対戦することになるかもしれないのだ。

キックボクシングやサバットを習う際、柔道やたとえば、レスリングや相撲を習っていたとしても、それはグラップリングの世界の話で、打撃とは関係ないので、正直に周囲に話してもいいだろう。しかし、自分がコークスクリューキックを基本の蹴り方に行っていることは、絶対に話してはいけない。

コークスクリューキックの蹴り方は、基本は二つある。オーソドックスなら、左はスイッチしてから、蹴る。右はステップしてから、蹴るのが基本だ。膝が相手に向かって直線で当たるように、練習をする。ミットを蹴るときも、いきなり回し蹴りではなく、独特の膝蹴りでミットを蹴ってから、足先を当てる練習をする。

サバットだったら、オーソドックスでもスイッチせず、左の回し蹴りを出す。あと、靴を履いているので、足先がちょっとあたればポイントになる。蹴りをスネでブロックするのは、反則だ。

雑誌で見たサバットの選手の第一印象は、あまりよくなかった。ゴルドーという反則をいとわないファイターが元世界王者で、ある代表的タイガージムの選手を「何でもあり」の試合で失明に追い込んでいた。

でも、サバットの指導者はゴルドーと違ってルールを厳格に守る紳士的な人だった。おかげで、サバットの練習を18年くらい続けて、今に至ることが出来た。最初にサバット教室で指導してくれた先生は、キックボクシングの日本チャンピオンになった。

サバットの指導者はアベックで、練習参加者の中には女性もいる。たしか、男性しかいなかったタイガージムと比べて、もちろん掴みがない競技ということにしろ、練習環境は大分違う。

ハイスクール 17

結局、ハイスクール 17 でせっかくはじめたタイガーのジムを半年でやめざるを得なかった。もともと、親が格闘技のジムに通うことなど、推奨してはいないので、日曜日にコンビニでバイトして、そのお金でジムに通っていた。しかも電車でだ。制服で通っているのは高校にバレるので、一端帰宅してから、私服に着替えて通っていた。他に高校生でタイガージムに通っていたのは、他には一人くらいだ。その人はかなりの上級者だ。

一応、中堅進学校だったハイスクールはバイトも禁止で、成績が下がると、下のクラス（準選抜クラス）に落とされてしまった。平日の夜、ジムに通って、日曜日はバイト、成績は下がり、バイトも週 1 ではなかなか仕事は身に付かず、高校では準選抜クラス、つまり選抜クラスより下のクラスに落とされた。ジムでは、膝が悪かったのに、運悪く、スクワット 1000（誰かぶっ倒れるまでスクワット！）をやらされていて、相当へこんでいた。悪循環だ。

自分なりに考えて、大学進学の方に専念し、バイトをやめることを選んだ。もちろんジムもあきらめた。スーパータイガージムに通うんだったら、毎日スクワット 200 は最低でも自主トレーニングしないと厳しい。腕立てはストレッチ腕立てとこのを練習する。

ハイスクール 16 の時の担任は真面目な独身物理教師だったが、ハイスクール 17 の時の担任は話のわかる体育教師だ。ちなみに、選抜クラスの担任は英語教師だ。体育教師の熱意ある進路指導のおかげで、大学には無事進学できた。今思えば、当時の担任の体育教師（恩師！）だったら、総合格闘技のジム通いと、高校生活の両立くらいは、喜んで受けていれてくれそうだった。保護者会で、同級生が合気道の道場に通っているだけで、担任の体育教師は満足していた。

高校時代は柔道部を辞めていたので、柔道の試合には出れなかった。例外的に参加を認められたのが、文化祭のクラス対抗柔道大会だった。ハイスクール 16 の時は、柔道部を同じく辞めていた先輩に判定負けした。ハイスクール 17 の時は、柔道部時代の後輩と当たって、延長の末勝った。ハイスクール 18 の時はブラジル人の留学生エリックと当たっ

て、勝った。もちろん、それが柔道であったから、だけど。総合や柔術だったら、結果はわからない。ハイスクール 17 の時の柔道大会の試合は担任の体育教師が見てくれたので、相当歓心を買った。

ハイスクール 18 の時の最後の柔道の試合は反則負けだった。ブラジル人のエリックと試合した時のファーストコンタクトがタックルだったので、次の日本人との試合で、マウントから、パウンドにいらってしまった。もちろん、相手に当てないようにしていたのだが、一発だけ当てしまった。

高校を卒業して、大学に進学し、総合格闘技サークルに顔を出すと、大学ではじめて柔道サークル柔会を何人かで集まって作った。でも、総合格闘技サークルにいい指導者がいないので見切りを付けると、柔道サークルも辞めてしまった。

何かを続ける時に、いい指導者を探すことは非常に重要なファクターだと思う。

大学院に入って、博士課程まで行くと、空いた時間にサバットのクラスに通いはじめて今に至っている。

中高一貫で男子校で、ジムも当然女子がない。そんなわけで、自分のハイスクール 17 は恋愛とはほど遠い世界だ。

誰でもおそらく経験するハイスクール 17 の時代。自分にとってはスーパータイガージムに通えたことが、唯一の財産になった。

後日談

ハイスクールを卒業して、約14年。タイゲーマスクは真のプロレスの復興と、武士道の再興のために、闘っている。結局、創始者であるタイガーもシューティングをやめていた。今は武士道空手という新しい武道を興そうとしている。

今はこの世界にシューティングという格闘技の名前はダイレクトには残っていない。戦いを修めるという意味の競技名に進化して、「シューティング」という名前はジムの名前に残っているだけだ。

コークスクリュキックも今では使う人をほとんど見かけなくなった。どこかであの蹴り方は膝に負担がかかると聞いたことがある。

スーパータイガージムのパンフレットにはこう書いてあった。最大の敵は自分自身であると。自分自身の心の弱さが格闘技を続ける最大の障害になるという意味だ。

確かに自分はタイガーのジムをやめてしまったし、この言葉は当たっている。でも、今も格闘技は続けている。

いつかまた総合格闘技のジムに通うための準備。特に苦手な打撃から。そんなわけで、大学の体育館のクラスでサバットの練習に通っている。博士号を取ったら、プロの研究者になって、また総合格闘技を基礎から練習したいと思っている。

自分は格闘家でもないし、総合の試合に出た訳でもない。でも、タイゲーマスクには感謝しているのだった。今、練習だけでもサバットを続けているのは、タイガージムで打撃の基本をみっちり習い、ハイスクール17時代にプロとスパーを経験したからだ。アッパーくったり、ガードポジションからパウンドの嵐を貰ったり、だったが、それはそれで今はいい経験になっている。

やり直しの効かない人生だが、自分は一度だけでもスーパータイガージムに通えるチャンスがあったことに感謝している。

ハイスクール17時代にジムに通えて、いい担任に巡りあったことに自分は今も感謝している。

国際試合!

10年以上続けたサバットの試合で、ついに国際試合に出ることになった。

今は博士号を取って、総合のジムに通いつつ、サバットも続けている。

事前情報では、対戦相手はフランスかイギリス出身で、サウスポーといわれていた。

覚えられない複雑な名前の相手。

今回は青コーナーだ。

リングにあがる。相手は顔面にスーパーセーフを着けている。

こちらは素顔だ。

ゴングが鳴る。相手はオーソドックスに構えている。

直前にフランス出身のオーソドックスの相手に変わったらしい。

バチバチと殴り合い、蹴り合う。

距離取ってフロンタル（前蹴り）に。

下段に散らして、ハイに。

あっという間の3ラウンド。

判定負けであったが、それなりに充実感があった。

博士号を持っているアマ格闘家をファイティング・ドクターと呼ぶ。

目指すはファイティング・プロフェッサー（格闘技を本気で修行している大学教授）だ。

道は続いている。それが正しい道であるならば、後にも道は続く。

ロボット

博士号を取ってからは、あの 그레이シーと引き分けた先生の総合のジムに通っている。

先生は、Uにも所属していないし、柔術の黒帯も持っていない。

でも、不思議なカリスマ性とセンスで、格闘技界のナガシマ扱いになっている。

キックの時間にあるトレーナーにファイトスタイルからサバットと呼ばれるようになった。

動きが硬い時はサバットからロボットに格下げになる。

元世界チャンピオンの女性から半年ボクシングを習った。

いつもサバットでも世界チャンピオンの女性に稽古をつけてもらっている。

色んな意味で、パンクラシストにもトレーナーとして稽古をつけてもらった。

相変わらず、顔面パンチは苦手だ。

ライトコンタクトのサバットの試合は、連敗中だ。

しかし総合のスパーク大会では、今の所無敗だ。

どちらもそんなに回数踏んでは、いないけど...

またロボットという汚名が、サバットに昇格するよう努力したい。

総合のジムの先生は、リングネームにサバットとつけてくれた。

それはキングオヴギャラクシーの作者は、小説で格闘シーンを描くのは得意だが、

実際の格闘技の試合、ガチ格闘の試合だと、参戦にいつも躊躇する。

これが現実かもしれない。

でも、いつかファイティング・プロフェッサーに昇格することを目指して修行を続けたい。

柔術はじめました

いつも通っている総合のジムで柔術のクラスに出ることにした。

柔術の先生はブラジリアン柔術黒帯で、足関十段の兄と呼ばれていた。

足関十段にもグラップリングを習ったことがある。

足関十段のレッスンの特徴はヒールホールドに代表される足関節技だけではなく、相撲と呼ばれる相手からダウンを奪うまでの技の掛け合いの練習をすることだ。

相撲で、俺は山嵐を使うことを覚えた。

道着を着ないグラップリングでは、片襟背負と払腰のコンビネーションとされる山嵐を忠実に再現することはできない。

代わりに、一本背負と払腰のコンビネーションである、崩れ山嵐を使っている。

柔術の技を研究するにあたって、俺は、神道六合流柔術の教本を参考にしている。

神道六合流柔術は大正時代に流行った流派で、文字通り6つないし7つの流派の柔術を総合したものだ。

神道六合流柔術の教本『奥秘柔術教授書』によると、柔道+足関節（+打撃）を乱取りの技として採用し、さらに諸流派の型を残している。

打撃はサバットの現代の打撃を採用することとして、投げ技と関節技は、神道六合流柔術を参考にして練習を続けたい。

今通っている総合のジムは打撃と関節技（寝技）が中心で、投げ技（バスター）は推奨されない。

俺はバスター主体のバスター教徒だが、ジムの師匠は関節技の魔術師の異名を取っている。

昔は、ブラジリアン柔術を習うより、個人的には日本の講道館柔道を学びたいな、と思った時期もあった。

せっかく柔道で黒帯を持っているので、憧れの講道館に年に一回くらいのペースで練習に行ったこともあった。

今は疫病が流行っており、柔道の練習に行くことは個人的には我慢している。

柔術のスパークで、山嵐や神道六合流の技を極めることを目指して、格闘技の練習を続けたいと願っている。

カポエイラはじめました

もちろんフランスのサバットの練習は継続していて、サバット協会の練習に、総合のジムに行かない時はでているが、最近ブラジルのカポエイラをはじめました。

カポエイラは小学生から大人まで楽しめるブラジルのスポーツで、音楽やダンス、格闘技の要素を含んでいる。Jogo という円になって対で演舞する要素もある。

カポエイラではアウーという側転や、バナネイラという逆立ちを基本練習に取り入れている。

はじめて俺がカポエイラという存在を知ったのは餓狼伝説3のボブ・ウィルソンというカポエイラ使いのキャラクターを通じてだ。

もちろん、大学に入ってからポルトガル語を勉強したり、大学院でカポエイラをやったことのある同級生と知り合って、カポエイラを再認識した。

しかし、いつも通っている総合のジムでカポエイラを学ぶことができること、迫先生の漫画『バトゥーキ』の影響が大きい。

いくら俺がサバットを18年間習っていても、サバットを主体に取材した小説を書くことは、おそらく難しい。サバット使いの登場人物を描くことはできるが、迫先生のように背景にある哲学的理念、文化的価値や歴史に踏み込んでまで、サバットを題材にすることはできないだろう。

小学生時代から音楽とダンスが苦手な自分としては、せめてサバットの技術にカポエイラのキックが逆輸入できるくらいになるまで、修行してみたいと思っている。

カポエイラ緑帯取得しました

毎週一回1年間以上続けたカポエイラ。

ついに緑帯を取得しました。
一番最初の帯です。

カポエイラの帯はブラジルの国旗の色に合わせているそうです。流派によっては白帯が最高段位であることも。ちなみにカポエイラでは級と段を区別しないようです。

アメリカのLAから来たメストレ（師範）から頂いたアペリード（カポエイラネーム）はAlegriaです。ポルトガル語で喜びを表します。迫先生の漫画『バトゥーキ』の主人公と同じアペリードです。

緑帯を取得するにあたって、ポルトガル語で歌（Zum, zum, zum）と楽器（パンデイロ）の同時演奏を求められます。音楽の試験が終わった後、初帯だと命名のためのメストレ（師範）との組手、その後、他団体の先生（プロフェッショナル）との組手で、はじめて帯がいただけます。

格闘は今までの積み重ねがありますが、音楽は睡眠時間を削って三ヶ月猛練習をしました。

次の帯は、ビリンバウ独奏と2曲独唱が必要のようです。組手も二人抜きが目安です。

本当は空手の黒帯も取得したいです。

無事カポエイラの緑帯が取得できたので、次の修行のフェーズに移りたいです。

音楽の特訓に付き合っていたいただいた練習仲間と指導者の先生に感謝いたします。

あとがき

この作品は、実際に作者も習ったことのある柔道やシューティング、それにサバット、カポエイラや柔術や総合格闘技の練習・試合の体験をもとに描いた小説です。

夏木康志

奥付

奥付

ハイスクール 17

<https://puboo.jp/book/42734>

著者：夏木康志

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/ynatsuki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/42734>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42734>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<https://puboo.jp/>）

運営会社：株式会社 paperboy&co.

ハイスクール17

著 夏木康志

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
